フランスのライプニッツ研究の現在

林　拓也

はじめに

本稿はフランス、特にパリにおけるライプニッツ研究の現況（2016 年 12 月時点）を筆者の留学経験[1]を交えながら紹介するものである。過去のライプニッツ国際会議および 2005 年時点における各国のライプニッツ研究の状況については酒井潔教授による報告（酒井潔『ライプニッツのモナド論とその射程』知泉書館、東京、2013 年、第 V 部）を参照されたい。2015 年の留学開始以後の情報を中心に記述するが、とりわけ重要と思われる事柄についてはそれ以前のものも報告することにしたい。まずライプニッツ研究の二つの学会を見た後で、フランスのライプニッツ研究者と学生、近年の出版を紹介する。

1. 二つの学会

酒井潔教授による 2005 年時点でのライプニッツ研究紹介以降の、フランスでの大きな出来事として、まずつぎの二つの学会の創立を挙げなければならない。正確な時期は不明であるが、2011 年以降に「ライプニッツ研究センター」（Centre d'études leibniziennes）が、ジャン＝バプティスト・ロージー教授（Jean-Baptiste Rauzy）をディレクターとしてパリ第四大学パリ・ソルボンヌにて創立された[2]。センターのホームページによれば研究領域の分担は以下の通りである。

・法哲学（P. Boucher, A. Thiercelin）
・形而上学（J.-P. Anfray, M. Devaux, J.-M. Fleury, A. Pelletier）
・数学の歴史と哲学（M. Serfati, D. Rabouin, C. Schwartz, V. Debuiche）
・自然の諸学、生命の形而上学、経験的世界の理論（F. de Buzon, A. Charrak, A.-L. Rey, J. Rolland）
・理性文法、言語と精神の哲学　（E. Cassan, A. Costa, J.-B. Rauzy）
・神学と弁神論、道徳哲学　（M. de Gaudemar, P. Rateau, C. Rosler）
・ライプニッツの受容と新ライプニッツ主義　（共通）

メンバーには狭義のライプニッツ専門家だけでなく、マルブランシュ（Schwartz）、デカルト（De Buzon）、啓蒙期のフランス哲学（Charrak）、現代形而上学・認識論（Thiercelin）を専門とする研究者が含まれている。会長のロージーは *La doctrine leibnizienne de la vérité : aspects logiques et ontologiques*, Vrin, 2001 および論理学・形而上学著作の翻訳 *Recherches générales sur l'analyse des notions et des vérités, 24 thèses métaphysiques et autres textes logiques et métaphysiques*, introduction et notes, Paris, 1998 の編集者としてよく知られているが、現在では現代の分析哲学を中心に研究し、上の分類における新ライプニッツ主義に相当する内容も扱っている。この研究センターの活動はあまり活発ではないと聞いていたが、2016

[1] 筆者は 2015 年 9 月から一年間パリ第一大学パンテオン・ソルボンヌ（Université Paris 1 Panthéon-Sorbonne）で研究者として活動し、その後同大学博士課程に入学しライプニッツ研究を継続している。
[2] http://www.paris-sorbonne.fr/presentation-4960（2016 年 12 月 15 日）

年7月ハノーファーで開催された第10回国際ライプニッツ会議「私たちの幸福と他者の幸福のために」ではこのセンターのセッションが設けられ、上記の一部のメンバーその他の発表が行われた。

もう一つは、2013年11月パリ第一大学パンテオン・ソルボンヌにてポール・ラトー准教授（Paul Rateau）を会長として創立された「フランス語ライプニッツ研究協会」（La Société d'études leibniziennes de langue française）である[3]。パリ第四大学名誉教授ミシェル・フィシャン（Michel Fichant）を名誉会長、モントリオール大学名誉教授フランソワ・デュシュノー（François Duchesneau）を副会長としている。研究会等は原則的にフランス語で行われるが、メンバーはフランス、カナダ、ベルギーの他、筆者が知る限り、ドイツ、イタリア、スペイン、ポルトガル、アルゼンチン、日本等の非フランス語圏の研究者も含まれている。

活動は（1）隔年開催の会議（congrès）、（2）毎月開催のセミナー（séminaire）（3）出版の面で活発に行われている。

（1)第一回会議は2014年9月に、「1714-2014：今日G. W. ライプニッツの『理性と恩寵の原理』を読む」というテーマで、パリ第一大学において開催された。2016年3月には、第二回会議「ライプニッツと調和」がリヨン高等師範学校およびゲーテ・インスティチュートで開催された。そのほかにも、2015年5月には国際シンポジウム（colloque internationale)「ホッブズ、ライプニッツ、自由と必然性の迷宮」がパリ第一大学で、また2016年7月にはライプニッツ第10回国際会議の一セッションとして、「ライプニッツとフランス」をテーマにした研究発表がハノーファーで行われた。

（2）フランス語ライプニッツ研究協会創立以前の2010年10月から、ポール・ラトーとアンヌ＝リーズ・リー（Anne-Lise Rey、リール第一大学准教授）がパリ第一大学で原則毎月開催のセミナーをオーガナイズしている。このセミナーではフランスの研究者だけでなくヨーロッパ各地の研究者が招待され、1時間程度の発表に30分程の質疑応答が続く。セミナー後にはしばしば夕食会が行われる。この機会がパリのライプニッツ研究者たちの交流の場になっているように思われる。

（3）2015年には雑誌 *Archives de Philosophie* を媒体として、「ライプニッツ紀要」（Bulletin leibnizien）第一号が公開された（インターネット上で無料で閲覧可能である）。巻頭言によれば、これは *Studia Leibnitiana* （シュトゥットガルト、フランツ・シュタイナー出版）と 北米ライプニッツ協会の *Leibniz-Review* に続いて、ライプニッツ研究の最新情報を提供しようとするものである。現在も編纂作業が続けられているアカデミー版全集をはじめとしたライプニッツの一次文献とその翻訳の紹介に加えて、フランス内外の論文集、モノグラフィーの批判的な書評が掲載されている。

これら二つの学会とは別に、時折ライプニッツについての研究会、研究書の合評会を開催するものとして、「デカルトセミナー」（Séminaire Descartes. Nouvelles recherches sur le cartésianisme et la philosophie moderne）とパリ第七大学を中心にした研究所（Laboratoire SPHERE）がある。2015-2016年度には、フランス国外からも、ロジャー・アリュー（Roger Arriew)、ダニエル・ガーバー（Daniel Gerber)、オハッド・ナハトミー（Ohad Nachtomy)、スティーヴン・ナドラー（Steven Nadler），リチャード・アーサー

[3] https://leibnizsellf.org/ （2016年12月15日）

（Richard Arthur）、マッシーモ・ムニャイ（Massimo Mugnai）といった著名な研究者がパリを訪れていた。

2. フランスのライプニッツ研究者

イヴォン・ベラヴァル（Yvon Belaval）に続くライプニッツ研究の大家の一人であったアンドレ・ロビネ（André Robinet）が 2016 年 10 月 13 日に逝去した。フランス語ライプニッツ研究協会のホームページ上でも氏に哀悼の意が捧げられている。ソルボンヌ広場の哲学書店 Vrin でもショーウインドーでロビネ特集が組まれたのであった。さて、現在は現役を引退しているものの、フランスのライプニッツ研究の精神的支柱となっているのが、前述のパリ第四大学名誉教授 M. フィシャンである。フランス語ライプニッツ協会のフランス人若手メンバーの多くが、フィシャンの指導を受けて育っており、歴史的研究を特徴としている[4]。

まず形而上学を主に扱う研究者について。P. ラトーは弁神論研究の専門家であるとともに、40 代前半と若くしてフランス語ライプニッツ研究協会の会長となり、様々な研究会の開催、各国のライプニッツ協会との連携等でリーダーシップを発揮している。2015 年に来日し、東京で三つの講演を行っている。モーゲンス・レールケ（Mogens Laerke）はデンマーク出身であるが、パリ第四大学で博士号を取得し、現在はリヨン高等師範学校で国立科学研究センター（CNRS）の研究者として活動している。彼はアバディーン大学での研究歴もあり、英語圏での活躍も目立つ。大部 *Leibniz Lecteur de Spinoza. La genèse d'une opposition complexe,* Paris, 2008 は、L. シュタイン、G. フリードマンらによるスピノザ・ライプニッツの比較研究を一新するものと言っても過言ではないだろう。ジャン＝パスカル・アンフレイ（Jean-Pascal Anfray）は未出版の神の知についての博士論文でパリ第四大学博士号を取得。現在はパリ高等師範学校准教授である。分析哲学、スコラ哲学の方面でも活躍している。アルノー・ペルティエ（Arnaud Pelletier）は普遍学についての博士論文でパリ第四大学博士号を取得し、現在はブリュッセル自由大学教授である。リエージュ大学のローランス・ブキオー（Laurence Bouquiaux）とともにベルギーのライプニッツ研究を担っており、*Leibniz and the scholastics*, 2014; *Leibniz and the Aspects of reality*, 2016; *Leibniz's experimental philosophy*, 2016 の編集等も重要な業績である。マリーヌ・ピコン（Marine Picon）はパリで活動しているが、博士号は 2015 年にリヨン高等師範学校で取得した。まだ大学の職に就いていないため上記の研究者と比してあまり知られていないと思われるが、形而上学史研究にも詳しく、フランスでは目立つ存在である。2013 年にフィシャンの指導下でパリ第四大学博士号を取得したアルノー・ラランヌ（Arnaud Lalanne）は現在ボルドーのリセで指導を行う若きライプニッツ研究者である。300 頁ほどの本体に 1000 頁以上の付録が続く博士論文は、理由律の歴史的研究としては最も包括的と言えるだろう。2016 年 11 月にはボルドーで、理由律をテーマとした国際シンポジウム（Principia rationis. Les principes de la raison dans la pensée de Leibniz (1646-1716)）を主催している。現在は理由律の受容史研究を進めているとのことである。また、現在はライプニッツの専門的研究から少し距離を置いているも

[4] ただし以下で挙げるすべての研究者がフィシャンの弟子であるわけではない。またここですべての研究者を挙げることはできないことをお断りしておく。なお、ここで紹介する研究者によって近年フランス語で著された研究書については、第 4 章を参照されたい。

のの、ライプニッツ研究センター会長 J.-B. ロージーや、パリ第十大学名誉教授マルティン・ド・ゴドゥマー（Martine de Gaudemar）に加えて、フィシャン及びヴァンサン・カロー（Vincent Carraud）の弟子である、カーンのミカエル・ドゥヴォー（Michaël Devaux）もライプニッツ形而上学の重要な研究者として挙げないわけにはいかない。

形而上学以外の領域としては、自然学についての未出版の博論の著者アンヌ＝リーズ・リーがヴォルフ、クザーヌスとライプニッツの比較研究の論文集を編集し、最近では『デ・フォルダーとの往復書簡』の仏訳を出版している。現在リール第一大学准教授である。レールケとともにリヨン高等師範学校に CNRS の研究員として所属するラファエル・アンドロー（Raphaële Andrault）はプリンストン大学での留学経験があり、自然学方面の研究で盛んに活動している若手研究者である。パリ第七大学教授のジャスティン・スミス（Justin E. H. Smith）は *Divine Machines: Leibniz and the Sciences of Life*, Princeton University Press, 2011 等によって知られ、2013 年には日本ライプニッツ協会大会にも招待されており、英米圏でも活躍する研究者である。数学方面ではパリ第七大学 CNRS 研究員ダヴィド・ラブアン（David Rabouin）が普遍数学の代表的研究者であり、近日ライプニッツの数学著作の仏訳を出版予定である。パリ第七大学教授ミシェル・セルファティ（Michel Serfati）やエクス＝マルセイユ大学准教授ヴァレリー・ドビュッシュ（Valérie Debuiche）も数学方面で業績を挙げている。

3. フランスでライプニッツを研究する学生

フランス、とりわけパリでライプニッツに関心を持つ学生は多くいるが、専門的に研究する学生は筆者の知る限りそれほど多くない。身近な博士課程の学生としては、2016 年にそれぞれライプニッツとバークリーの比較研究、ライプニッツの力学についての博士論文を提出したばかりのロール・ペドロノ（Laure Pedrono、パリ第一大学）とマチュー・ジビエ（Mathieu Gibier、ナント大学）、初期の自然哲学を中心に研究している今野諒子（パリ第四大学）、2016-2017 年度に博士課程に登録し、創造論と無の問いに取り組むチリ出身のカミロ・シルヴァ（Camilo Silva、パリ高等師範学校）がいる。修士課程には、ベルギーの学生も含めると、神の知の問題を扱うパリ第四大学の学生、ブリュッセル自由大学で新プラトン主義とライプニッツというテーマを扱う学生、ボルドー大学で実体概念に取り組む学生、リヨン高等師範学校でライプニッツを学ぶ学生、アンジェで言語哲学に取り組む学生がいる。

2015-2016 年度以降で筆者が確認したかぎり、パリでのライプニッツについての学生向け特殊講義（セミナー（séminaire））は四つあるいは五つある。2015-2016 年度にはラトー（パリ第一大学）による「ライプニッツと最善可能宇宙の問い」、そしてアンフレイ（パリ高等師範学校）による「必然性と偶然性。ライプニッツにおける様相の論理学と形而上学」についてのセミナーが行われた。ラトーのセミナーは、P. Rateau, *Leibniz et le meilleur des mondes possibles*, Paris, 2015 の内容を学生向けに語り直すものであった。修士課程 1 回生を中心に 50 名ほどが出席していた。授業中の質問を受け付けていることもあって、多くの質問がなされていた。アンフレイのセミナーは古代・中世の様相理論の紹介から始まり、テクストの抜粋集にコメントしながらライプニッツの様相理論を体系的に論じるものであった。20 数名が出席していたであろうか。ロージーのセミナーはライプニッツ自身でなく、ライプニッツに関わるテーマ

を扱う 20 世紀の分析哲学者についてのもので、出席者は修士 2 回生の学生 10 数名であった。2016-2017 年度には前期にカロー（パリ第四大学）のセミナー「ライプニッツと古代哲学」が行われており、後期にはラトー（パリ第一大学）のセミナー「ライプニッツと自由の問い」が開講予定である。

4. 近年の出版

フランス語で著された近年のライプニッツ研究書の出版状況については、フランス語ライプニッツ研究協会のホームページ上で目次とともに、また上述の「ライプニッツ紀要」（Bulletin leibnizien）では批判的書評とともに確認することができる。詳しい内容はその書評に譲ることとし、ここでは紀要で取り上げられていないものを含め、2013 年以降のものに限ってごく簡単に紹介することにしたい。ただしここでも紹介する本のリストが網羅的でないことをお断りしておく。

まず弁神論関連の著作としては、P. Rateau, *Leibniz et le meilleur des mondes possibles*, Paris, classiques Garnier, 2015 が重要である。これはラトーが様々な機会に発表した論文を一冊にまとめたものであり、*La question du mal chez Leibniz : Fondements et élaboration de la théodicée*, Honoré Champion, Paris, 2008 の内容を別の角度から自由に論じるもの、あるいは前著で論じられていなかった諸論点を補うものになっている。G. Gaiada, *Deo volente. El estatus de la voluntad divina en la teodicea de Leibniz*, Grenade, Editorial comares (nova Leibniz), 2015 はパリで活動するアルゼンチン出身研究者による弁神論の発展史的研究であり、巻末にはフランス語の要約が付されている。

17, 18 世紀の哲学者との比較研究の出版も相次いでいる。まずスピノザとライプニッツについて。R. Andrault, M. Laerke et P.-F. Moreau (dir.), *Spinoza/Leibniz. Rencontres, controverses et réceptions*, Paris, Presses de l'université Paris-Sorbonne, 2014 は、この領域を扱うフランス内外の研究者の 15 本の論文を、神、世界と実在者、様相哲学、自然界、受容史の 5 部に区分して収めたものであり、すべてフランス語で読むことができる。なお同時期に出版された論文集 L. Cabañas & O. M. Esquisabel (ed.), *Leibniz frente a Spinoza. Una interpretación panorámica*, Granada, Comares/UCA (Filosofia hoy), 2014 の 18 本の論文はすべてスペイン語のものだが、執筆者はスペイン語圏外の研究者の方が多い。R. Andrault, *La vie selon la raison. Physiologie et métaphysique chez Spinoza et Leibniz*, Paris, Honore Champion (travaux de philosophie), 2014 は生命の問題を詳細に論じている。スピノザ以外の哲学者との比較研究としては、ピエール・ベール（C. Leduc, P. Rateau et J.-L. Solère (ed.), *Leibniz et Bayle : Confrontation et dialogue*, Stuttgart, Franz Steiner Verlag (Studia Leibnitiana– Sonderheft 43), 2015）、 ディドロ（C. Leduc, F. Pepin, A.-L. Rey et M. Rioux-Beaulne, (ed.), *Leibniz et Diderot – Rencontres et transformations*, Montréal–Paris, Presses de l'Université de Montréal–Vrin (Analytiques), 2015）についての論文集のほか、M. Laerke, *Les Lumieres de Leibniz. Controverses avec Huet, Bayle, Regis et More*, Paris, classiques Garnier, 2015 が出版されている。

博士論文にも特筆すべきものがある。A. Lalanne, « Genèse et évolution du principe de raison suffisante dans l'œuvre de G. W. Leibniz », Thèse de doctorat soutenue en 2013, Paris-Sorbonne は第一部でライプニッツの理由律の歴史的リソースをプラトンの伝統、アリストテレスの伝統、ストアの伝統、キリスト教

の伝統、近代の五つに見出し、第二部ではライプニッツの生涯における理由律の発展を五つの段階を区別しながら辿っている。付録での整理された豊富な原典の引用は、ライプニッツの専門家以外の哲学史研究者にとっても貴重なものであろう。これはインターネット上で無料公開されている。なお、同著者による *Apprendre à philosopher avec Leibniz*, Paris, Ellipses, 2015 は学生向けの入門書シリーズのライプニッツ版である。ライプニッツ哲学の諸テーマに 11 章が捧げされ、各章でまずそれぞれの説明がなされたうえで、抜粋されたテクストの「コマンテール」を実演するという構成になっている。巻末には 23 頁の用語集が付いている。Picon, Marine, « Normes et objets du savoir dans les premiers essais leibniziens », Thèse de doctorat soutenue en 2015, Lyon は、第一部「百科全書のプロジェクトと学の規範」、第二部「普遍と永遠真理」の二部構成で、1670 年代までの初期著作における形而上学と認識論を論じている。氏の業績のとりわけ注目すべき点として、C. マーサー（Cristia Mercer）による初期ライプニッツ認識論のプラトン主義的特徴づけに対する批判、初期ドイツ講壇形而上学を含む近世スコラ形而上学と初期ライプニッツとの関係の調査等が挙げられると思う。

翻訳に関しては、A.-L.リーによる『デ・フォルダーとの往復書簡』の全訳（*Leibniz – De Volder. Correspondance*, Vrin, Paris, 2016）が英訳に続いて公刊された。ライプニッツの初期哲学と数学著作の翻訳の出版も予定されているという。

またライプニッツ特集として、*Leibniz. Monades et mondes, Archives de Philosophie*, 2014/1 (Tome 77) のほか、*Leibniz en 2016, Les Études philosophiques,* 2016/3 (N° 163)および *Leibniz après 1716 : comment (ne pas) être leibnizien ?, Les Études philosophiques,* 2016/4 (N° 164)が組まれている。

おわりに

フランスの研究者は一般的に個人主義的だと聞いていた。しかし実際には少なくとも最近の状況として、また狭義のライプニッツ研究に関するかぎり、緊密な研究のネットワークが構築されており、研究成果の共有が進んでいる、というのが筆者の印象である。

2016 年はライプニッツの没後 300 年に当たり、世界各地でライプニッツ関連のシンポジウム、出版が相次いだ。本稿で紹介できたのはその一部に過ぎない。今後もフランスのライプニッツ研究その他の状況を報告する機会があればと考えている。

L'État de la recherche française sur Leibniz

Takuya Hayashi

L'objectif du présent article est de dresser un état des lieux de la recherche française sur la philosophie de G. W. Leibniz dont l'année 2016 marque le tricentenaire de la mort. Sans pourvoir être exhaustif, l'auteur, qui étudie la métaphysique de Leibniz à Paris, fournira un aperçu des Centres de recherche, des livres récents, etc.